

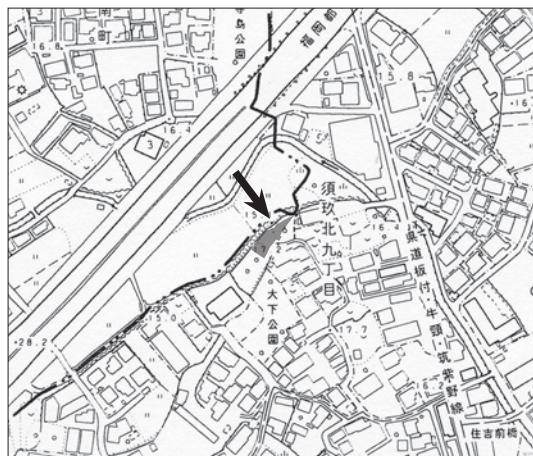
3 御陵遺跡（3次調査）

所在地 春日市須玖北9丁目 85番・118番の一部

調査面積 243.2m²

調査期間 2013年7月23日～9月17日

御陵遺跡は、須玖遺跡群が所在する春日丘陵の西側に広がる台地の北端部に存在する。平成2年と平成20年に発掘調査が行われ、弥生時代～古墳時代を主体とする遺跡が確認された。特に弥生時代に関しては、青銅器鋳型、銅矛中型、坩堝／取瓶、輸送風管、銅滓などの青銅器鋳造関連遺物が出土するため、当遺跡内



1. 調査地の位置 (1/5000)

に未確認の青銅器工房が存在することは間違いない。なお、当遺跡の北端部には前期古墳の可能性がある御陵古墳がある。

今回の調査は商業施設建設前の造成工事に伴う緊急発掘調査である。

遺構・遺物

3次調査は御陵遺跡の北端部に当たり、目と鼻の先に御陵古墳が存在する。北側は水田として活用され、低地となっており、当地が台地の北端部であることが分かる。重機を使用し、20cm程度の表土を取り除くと赤褐色粘質土を主体とする地山面を検出し、黒褐色土を覆土とする掘立柱建物跡4棟



2. 調査区全景

以上、井戸 1 基、溝 6 条、多数のピットを検出した。なお、遺構検出面の標高は 16 m 前後である。

確認した 4 棟の掘立柱建物跡は弥生時代のもので、確認できたものは 1 間 × 2 間の建物である。この他にも大形のピットが数基存在するため、4 棟以上の掘立柱建物が存在するものと考えられる。1・2 号掘立柱建物跡は近代まで使用された溝の西側で検出した。1・2 号掘立柱建物跡は重なっており、1 号は 2 号を若干広げたような配置をとるため、建て替えと考えられる。

井戸は素掘りで、平面形が径 1 m の円形、深度は 2.5 m 程度であった。底面近くからは祭祀に使ったと考えられる弥生時代後期の甕や手握土器などが出土した。

6 条の溝のうち、3 号溝は調査区中央南で検出した弥生時代の溝である。溝としたが、調査区外まで延びたために土坑の可能性もある。出土土器が乏しいため詳細な検討は難しい。当溝からは銅鐸の型を彫り込んだ鋳型が 2 片出土した。2 片は接合する鐸の裾部の破片である。風化が著しく、不明瞭ではあるが文様のようなものもあるため、鐸形銅製品とした方が良いのかも知れない。4 号溝は弥生時代終末～古墳時代初頭の溝であり、上層から武器鋳型の小片が出土した。その他に溝については、須恵器小片が出土するため、歴史時代のものと考えられる。なお、上述した 2 点の鋳型以外にも攪乱などから、銅矛鋳型と不明銅製品、合計 4 点の鋳型が出土した。

小 結

御陵遺跡は、過去の調査でも複数の青銅器鋳型が出土しており、今回の 3 次調査でも 4 点の出土があった。今後の調査によって、当遺跡において青銅器工房が確認される可能性は高い。そうすれば、奴国の官営工房と称される須玖岡本遺跡坂本地区との比較・検討の必要が生じ、両遺跡の性格も明らかになるだろう。

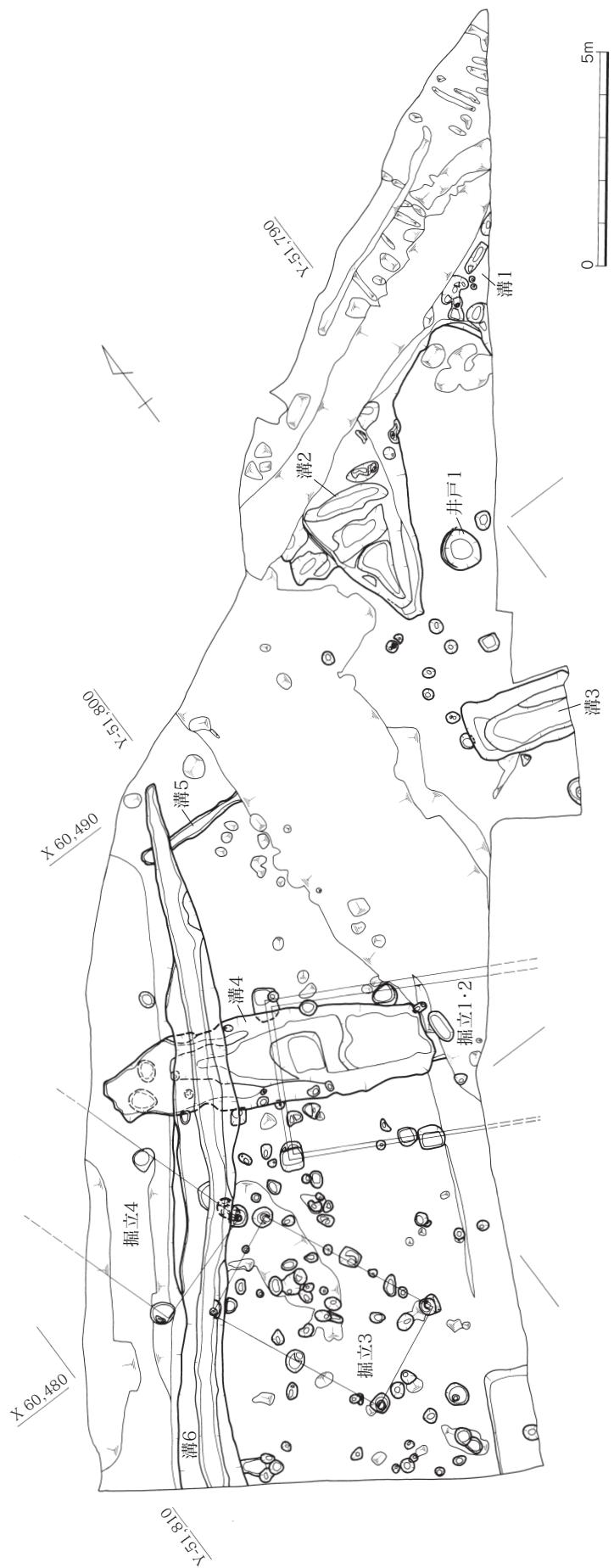
(井上)



3. 1・2 号掘立柱建物跡（南から）



4. 1 号井戸（西から）



5. 遺構配置図 (1/150)